



木村恵美は  
嘘を吐く

秋乃

お題『嘘』『台風』『厚い』

木村恵美。

彼女は息をするように嘘を吐く。

「新藤君。私は生まれてこのかた、嘘なんて吸ったことも吐いたこともないのよ」

ダウト。今日も第一声から嘘なんだから、日常会話は押して知るべきだ。というか嘘を吸ったことのある人間はもう人間のレベルじゃあない。

そんな僕らが今日も今日とて何をしているのかといえば、

「さ、本日もスパイ活動をしましょうか」

若干惜しいがそれも嘘だ。実際はスタバの窓際一番端に陣取り、以外と知られていない二杯目は同サイズ百円でおかわりできるアイスコーヒーを飲みながら、反対側の奥の席にある人物が座るのを待っている。が、世界の危機や国家の存亡などには一切関与していないことは僕が全力で保障する。

「……恵美さん。さすがに今日は来ないんじゃないですか？」

「いいえ。彼女は来るわ。それは君が生まれる前から決まっていたこと」

なんともオカルトチックな切り返しをされてしまった。しかし僕は半ば呆れ顔で大きな一枚窓の外を見る。

横殴りの雨と風が、OLのビニール傘をこれでもかとへし折っていた。

関東一円に大型台風の残滓が上陸したのは今朝方のこと。弱まってきたとはいえ、まだまだ若いもんには負けん！ と息巻いているようで。

今日で連続三日目になる恵美さんとのデート……もとい重要人物の張りこみも、今日ばかりはないだろうと思っていたのだが、きっかり八時半に携帯に電話がかかってきた。勿論発信者は、舌から生まれてきたのであろう正面に座る女性。鼻真目に見ても見目麗しい容姿を、明らかに店内で浮いているグレーの男物コートと大きなキャスケット、それにまさしく牛乳ビンの蓋を二つ繋げたような分厚いグリグリ眼鏡で覆い隠し、僕の肩越しにターゲットが現れるまでひたすら冷たいコーヒーをストローで啜っている。

「恵美さん。妹が心配なのは分かりますが、どうして僕まで？」

「いい？ 新藤君。私は妹が誰と付き合っただんな人生を歩もうが、全く興味ないもの。それこそ髪の毛の先ほどもね。だから、私達が待っているのは私の妹などではなく……そう、敵のスパイである男の方よ。あと君は私の助手」

言い終えるなり彼女の小さな唇が啜えたストローが、物凄い勢いで黒い液体を吸い上げていく。恐らく瓶底眼鏡の向こう側では大きな二つの瞳がせわしなく上下左右に動き回っていることだろう。嘘はナチュラルに紡がれるが、恵美さんの瞳は口ほど嘘が達者ではないのだ。`目は口ほどにものを言う、とはよく言ったものだなと、昔の人に敬意を持って感心してしまう。

ともあれ、敵かどうかまでは知る由もないが、僕らは恵美さんの妹さんがよく利用していると聞いているスタバで、妹さんの周囲に最近ちらほらし始めたらしい男の影を追っているのだ。もっとも、絶対認めないだろうけれど唯一の妹を溺愛している恵美さんからの情報に基づいた張りこみなので、その信憑性も疑わしい訳なのだが……。

三日目にもなれば、正面に座る女性の細かな仕草の意味も分かり始める。空のカップをくるくると回しているのは、どうやって嘘をついてコーヒーを取りに行こうか考えているからだ。たまには先制攻撃してやろうと思い、「おかわり取ってきます」と恵美さんのカップとレシートを掴み、立ち上がって振り向いた僕が見たのは、濡れて方々にのたうつ茶色い髪から水滴を滴らせた、後ろで変装している女性の素顔とそっくりな一人の少女。恵美さんを少し幼くしたようなその少女は、訝しげな眼差しを僕と恵美さんに交互に向け、口を開いた。

「何してるの？ お姉ちゃん」

「逃げるぞワトソン君！」

「ちょっ——！」

おいおい本当に華奢そうに見える女性の腕力ですかとツツコミを入れる間もなく、僕は恵美さんにかっちりと左の手首を拘束されたまま、二人で脱兎の如く土砂降りの路上に飛び出していた。

そのままどのくらい走っただろうか。

「あっ」

と言う間に彼女の肢体が前に傾いた。眼鏡と雨のせいで足元の縁石が見えなかったらしい。僕は咄嗟に、繋がっていた場所から離れていきそうになる体温を再び掴み直した。

「——っ！ はぁー……。驚いて飛び出して来たとはいえ、いくらなんでも前方不注意ですよ！」

縁石は、どう見ても普通なら見逃さないくらいの黄色い存在感を放っているのだ。

彼女は外れかけた分厚いレンズを鼻の上に乗せ直すと、今気付いたようにパツと繋いでいた手を振り解いた。

「全然見えてなかったんじゃないですか、その眼鏡」

お礼の一つもなく、急に無造作に手を振り払われてムツとした僕は、少しだけ棘のある声でそう言った。だから自分の妹があれだけ近付いてきていても気がつかなかったのだろう。

「見えているわよ、ちゃんと」

ほらまた嘘をつく。そろそろたしなめる言葉の一つでも言ってやろうかと口を開きかけた瞬間、サアツと幕が上がるようにあれだけ降っていた雨が止んだ。

「あ、晴れましたね」

空を見上げればどうやら台風の入ったらしく、分厚い雲がぽっかりとぼくらの真上だけなくなっていた。

「ありがとう」

「うわ、蒸し暑い……え？」

小さく聞こえたのはお礼……だったのだろうか？ 僕が顔を向けると、唐突に彼女は言った。

「見えない方がいいこともあるのよ」

どうということですか？ 首を傾げながらびしょ濡れの恵美さんを見ると、いつもの淡々とした口調で彼女はこう続けた。

「だって……恥ずかしいでしょう？」

分厚い眼鏡の向こう側は、僕には見えなかった。